



TITLE:

京大広報 No. 605

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 605. 京大広報 2005, 605: 2001-2020

ISSUE DATE:

2005-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196490>

RIGHT:



京大広報

No. 605

2005.10

目次

〈大学の動き〉

- 京都大学総合体育館等のアスベスト対策について……………2002
 理事, 副学長等が発令される……………2003
 部局長の交替等……………2004
 APRU/AEARUリサーチシンポジウム
 「環太平洋地域における地震危険度
 —その予測と防災—」を開催……………2005
 全学教育シンポジウム「学部教育・大学院教育の
 質の改善と自己点検・評価」を開催……………2005
 尾池総長の復旦大学百周年記念式典出席……………2006
 博士学位授与式……………2007

〈日誌〉

〈部局の動き〉

- 生存圏研究所が第6回国際木質科学シンポジウム
 等をインドネシア・バリにて開催……………2008
 寄附講座「日中環境技術研究講座」の新設……………2009

〈寸言〉

- 除虫菊と私 —私のライフワーク—
 勝田純郎……………2010

〈随想〉

- ラッセル・アインシュタイン宣言と湯川博士
 名誉教授 田中 正……………2011

〈洛書〉

- 問い合わせいろいろ 西山 伸……………2012

〈訃報〉

- ……………2013

〈話題〉

- 医学部附属病院で「小さな音楽の集い」を実施……………2014
 国際交流科目「中国の社会・経済・文化」の
 中国臨地研修, 初めての実施……………2015
 京都大学原爆災害総合研究調査班遭難者の
 慰霊の集いを開催……………2016
 「事務改善提案コンクール」表彰式を開催……………2016

〈公開講座〉

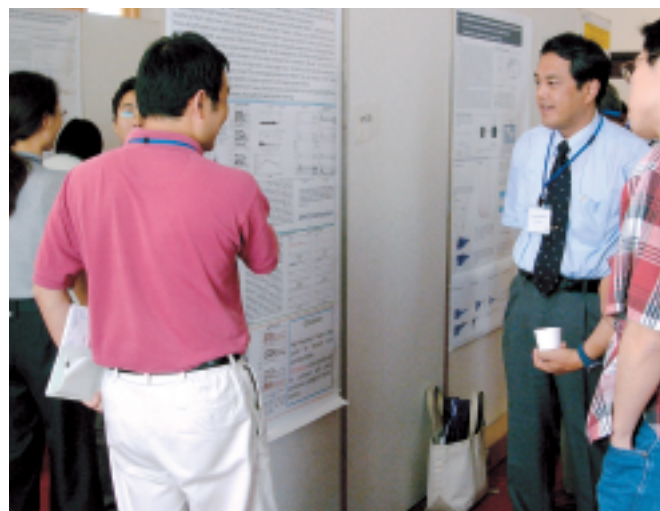
- エネルギー科学研究科公開講座……………2017
 京都大学21世紀COE「物理学の多様性と普遍性の
 探求拠点」第3回市民講座……………2017

〈お知らせ〉

- 京大サロン写真展……………2018
 高等教育研究開発推進機構特別企画展……………2018
 京大IIOフェア……………2019
 無料法律相談のお知らせ……………2019
 教育学研究科国際シンポジウム……………2020

〈編集後記〉

- ……………2020



大学の動き

京都大学総合体育館等のアスベスト対策について（2005年9月26日）

本学では、文部科学省からの「学校施設等における吹き付けアスベスト等使用実態調査について」(平成17年7月29日付け17文科施第154号)に基づき「吹き付けアスベスト」に加えて以前は調査対象とされていなかった「吹き付けロックウール」,「吹き付けひる石(パーミキュライト)」,「折板裏打ち石綿断熱材」の使用実態調査を行っており、現在までに調査対象面積の約75%の図面調査及び現地調査を実施した。

この調査によりアスベストが含まれている可能性が判明した吹き付け仕上材については、順次サンプリングを行い、環境保全センター及び外部専門機関によるアスベスト含有の有無に係る分析調査を実施している。

この結果、新たに、医学部附属病院R I 診療棟機械室等、人文科学研究所機械室、総合人間学部図書館機械室等、総合体育館アリーナ等の4施設にアスベストが含有されている吹き付け仕上材が使用されていることが判明した。

医学部附属病 R I 診療棟機械室等，人文科学研究
所機械室，総合人間学部図書館機械室等については，
用途上，一般の人が出入りできないように施錠管理
するとともに，やむを得ない出入りに際しては防塵
マスクの使用を求めている。

総合体育館アリーナ等の吹き付け仕上材については、定量分析の結果クリソタイルが約30%含有されていることが明らかとなった。また、総合体育館アリーナの空気中のアスベスト濃度の測定を行った結果は1リットルあたり0.9～2.8本（幾何平均値は1.3本）であった。

一般環境で検出されるアスベスト濃度は、おしなべて1リットルあたり0.1～2.0本、京都市域で0.1未満～1.8本となっている。この知見と比較すると、総合体育館アリーナの1リットルあたり0.9～2.8本という濃度は、館内に

発生源があると判断されるレベルである。なお、これらの濃度は労働安全衛生法上の管理濃度である1リットルあたり150本や大気汚染防止法上の敷地境界基準濃度である10本よりはかなり低い。

総合体育館の利用は
主に学生のクラブ・サー
クル活動で、常時生活している場所ではない（時間
限定かつ一般に4年以内）。上記の検出濃度および
健康影響のための評価値からは、体育館利用による
悪性中皮腫および肺がんの過剰発症予測値は十分に
小さい。しかし、絶対に発症しないとは断言するこ
とはできず、確率的に曝露者が増加すれば発症者が
出るおそれもある。

環境・安全・衛生小委員会において慎重に検討を行った結果、危険性は小さいが、総合体育館アリーナについては、不特定多数の学生、教職員が使用する建物であり、何より若年層が激しい運動を行う場であること、今後、建物の劣化によって飛散量が増加する懸念があり、また室内球技等により建築材料への外部擾乱を与える可能性があること、アスベストを含有する建材が存在することは事実であり、その建材の除去や封じ込め対策により飛散抑制は可能であるが、対策を先送りすることにメリットがないことから、教育的配慮等を総合的に判断して速やかに使用を停止し、除去することとした。なお、体育館の使用を控える期間中、学生のスポーツ活動や授業などに大きな支障を来たさないよう、代替場所等の手当を行うよう努める。

このことについて学生、教職員に対して速やかに周知を図るとともにさまざまな側面からの問い合わせに対応するため保健管理センター、環境保全センター、施設・環境部、学生部が連携し相談窓口を設置することとした。なお、今後も調査分析を継続し、環境・安全・衛生委員会における検討を踏まえ、適切な措置を講じていく。加えて早い機会に「アスベスト問題を考える」と題した公開シンポジウムを企画、実施することとする。

お知らせ

荷物の持ち出し等やむを得ず入館を希望される場合は、体育館事務室までご連絡ください。

学生部学生課
総合体育館事務室
(内線：2590)

2006年12月

京都大学総合教育館のウェブサイト閲覧について

本学においてもアスベスト問題に対応するために、アスベスト発見状況を調査してまいりました。調査は継続中ですが、関係・組合参事会「西宮キャンパス」においてアスベストを含有建材の調査の開始いたしました。直ちに健康への影響はないと考えられますが、教室の修繕等を総合的に判断して、途中に授業を停止し、除染工事を実施することとしました。結果、サウナ施設等とご利用の経路には関係なくご迷惑をおかけすることとなりますが、健康・安全第一の観点から事情をご理解いただき、ご協力いただきますようお願いいたします。

詳しくは、

<http://www.japhis.com/japhis.asp?ID=JAPHIS000001.htm>

理事、副学長等が発令される

前理事の任期満了に伴い、国立大学法人京都大学理事に再任2名を含む7名が10月1日付けで任命された。理事はすべて副学長を兼務する。また、新たに桂キャンパス整備・運営担当の副学長が任命されるとともに、理事に就任する副学長1名の後任者が任命された。

理事

(新任)

任期：10月1日～平成20年9月30日



丸山 正樹
企画・評価担当
(副学長)

前高等教育研究開発推進機構長
・高等教育研究開発推進センター長



松本 紘
研究・財務・情報基盤担当
(副学長)

前生存圏研究所長



木谷 雅人
総務・人事・広報担当
(副学長)

前文部科学省官房審議官



中森 喜彦
法務・安全管理担当
(副学長)



北 徹
病院・施設・国際交流担当
(副学長)

(再任)



東山 紘久
教育・学生担当
(副学長)



本間 政雄
事務改革・社会連携・渉外(東京)担当
(副学長)(非常勤)

副学長

(新任)

任期：10月1日～平成18年3月31日



林 哲介

(高等教育研究開発推進機構長)



荒木 光彦

桂キャンパス整備・運営担当
(工学研究科長)

総長特別顧問

(再任)

委嘱期間：10月1日～平成18年3月31日



平井 紀夫

オムロン株式会社
特別顧問 (非常勤)

部局長の交替等

(新任)

生存圏研究所長

川井秀一生存圏研究所教授
(生存圏開発創成研究系循環材
料創成分野担当(木質材料学))
が、松本 紘生存圏研究所長の
後任として、10月1日付けで任
命された。任期は平成18年3月31日まで。



高等教育研究開発推進センター長

林 哲介高等教育研究開発推
進センター教授(全学共通教育
カリキュラム企画開発部門担当
(物性物理学))が、丸山正樹高
等教育研究開発推進センター長
の後任として、10月1日付けで
任命された。任期は平成18年3月31日まで。



APRU/AEARU リサーチシンポジウム 「環太平洋地域における地震危険度—その予測と防災—」を開催

8月31日（水）から9月2日（金）まで本学時計台記念館国際交流ホールにおいて、APRU/AEARU リサーチシンポジウム「環太平洋地域における地震危険度—その予測と防災—」を開催した。本シンポジウムは、APRU（環太平洋大学協会）とAEARU（東アジア研究型大学協会）のプログラムの一つとして実施され、アジア太平洋地域の有力大学が加盟するこれらの大学連合の事業として、同地域の地震危険度の予測と防災に英知を出し合い、加盟大学の学術的な水準を高めるとともに、地域の災害の予測や防災に貢献しようと、8か国の26大学・研究機関から116名の研究者が参加した。

シンポジウムのレゾリューションのなかで、環太平洋地域における地震・津波に関する研究シンポジ



国際交流ホールでの講演の様子

ウムを毎年開催することが提案された。また、大阪大学とカリフォルニア大学バークレー校を主催として2006年に第2回のシンポジウムを、東京大学とインドネシア大学を主催として2007年に第3回のシンポジウムを開催することが確認された。

全学教育シンポジウム「学部教育・大学院教育の質の改善と自己点検・評価」を開催

9月1日（木）・2日（金）の両日、兵庫県立淡路夢舞台国際会議場において、教職員229名の参加を得て、「学部教育・大学院教育の質の改善と自己点検・評価」をテーマとする全学教育シンポジウムを開催した。

このシンポジウムは1泊2日の討論集会の形で、参加者が教育について全学的な議論や意見を交わすことにより共通理解を深め、今後の教育の改善・充実に資するとともに、部局の枠を越えた教職員の交流の場となることを目指して、平成8年から開催され、今回が第9回目となる。

今回は、高等教育研究開発推進機構と大学評価委員会の共催とし、中期計画や大学評価の基準・観点を念頭におきながら、教育の質の改善をどのように具体化するかについて検討するとともに、質の高い

自己点検・評価を練り上げていくため、各部局の検討・改善状況や経験を交流し、相互理解を深めることとした。

シンポジウムは、高等教育研究開発推進機構長丸山正樹教授の司会進行により、初日は丸山機構長と金田章裕理事による趣旨説明の後、尾池和夫総長に



全体会議での尾池総長の基調講演

よる挨拶および基調講演「京都大学を取りまく状況さまざま」に始まり、今回のシンポジウムのテーマに関連する林 哲介教授の基調報告に続き、丸山機構長から問題提起があった。

その後、以下の6テーマに分かれ、問題提起を踏まえた分科会討論が行われ、夕食後も引き続き、分科会討論及び全体でのフリー討論が夜半まで展開された。

- ①学部専門教育・全学共通教育のリエゾン：理系の場合
- ②学部専門教育・全学共通教育のリエゾン：文系の場合

③2006年問題を視野に入れた教育課程の改善

④学力差の拡がりにどう対応するか

⑤（自己点検・評価ワークショップ）学部教育・大学院教育の自己点検・評価に向けて

⑥（自己点検・評価ワークショップ）研究評価をどう考えるか

2日目は、各分科会から前日の分科会討論の報告があり、最後に全体討論が行われた。

今回のシンポジウムでは来るべき認証評価に向け、教育評価のあり方、更には各部局の進捗状況等について終始活発な議論や意見交換がなされ、盛会のうちに終了した。

尾池総長の復旦大学百周年記念式典出席

尾池和夫総長は、9月22日（木）から25日（日）まで復旦大学建校百周年記念式典に出席するため、中国上海の復旦大学を訪問した。この式典には海外から約130大学の学長、代表団が出席した。

京都大学と復旦大学は2002年に大学間交流協定を締結し、交流を続けており、日本研究センターには、本学経済学研究科が上海センターを設けている。また、今年度から学部学生の国際体験推進のため、国際交流科目を創設し、8月に復旦大学へ学生を派遣して研修を実施し、9月28日（水）から復旦大学の学生を本学に受け入れた。

式典に先立ち、22日（木）に、尾池総長はChen Limin副学長と会談し、祝辞を述べるとともに、今後の両大学の交流の促進について意見交換を行った。

23日（金）には、復旦大学において、百周年記念の行事として“Interaction between City Development and Higher Education”と題するフォーラムが催された。中国教育省副大臣、上海市長の挨拶の後、復旦大学長、国立シンガポール大学長、オックス

フォード大学長、シドニー大学長、イエール大学長、東京大学総長が講演を行い、会場の参加者および復旦大学の学生との間で活発な質疑応答が行われた。

24日（土）には、百周年を記念して大学構内に建設されたChia Tai Stadiumにおいてメインイベントである百周年記念式典が開かれた。尾池総長は、海外からの主要大学の学長とともに壇上に上がり、盛大なセレモニーが行われた。



復旦大学建校百周年記念式典

博士学位授与式

9月26日（月）午前10時30分から、時計台記念館国際交流ホールにおいて、尾池和夫総長、教学担当の理事をはじめ、各研究科長・学舎長出席のもと、博士学位授与式が挙行された。

総長から、各授与者に対し学位記（7月25日付、同9月26日付）が手渡された後、総長の式辞があり、午前11時30分に終了した。

各分野別内訳は次のとおりである。

総長式辞は総長室ホームページをご覧ください。

http://www.kyoto-u.ac.jp/uni_int/01_sou/050926.htm



授与式の様子

学 位	平成17年7月			平成17年9月			学 位	平成17年7月			平成17年9月		
	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計		課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計
博士（文 学）	3	3	6	—	—	—	博士（工 学）	1	2	3	27	1	28
博士（教 育 学）	3	—	3	—	—	—	博士（農 学）	6	4	10	1	1	2
博士（法 学）	1	—	1	—	1	1	博士（人間・環境学）	2	—	2	—	—	—
博士（経 済 学）	2	—	2	4	1	5	博士（エネルギー科学）	1	—	1	9	1	10
博士（理 学）	2	—	2	2	—	2	博士（地 域 研 究）	1	1	2	1	—	1
博士（医 学）	7	6	13	7	2	9	博士（情 報 学）	2	1	3	8	1	9
博士（社会健康医学）	—	—	—	—	—	—	博士（生 命 科 学）	4	—	4	1	—	1
博士（薬 学）	—	3	3	2	1	3	博士（地球環境学）	—	—	—	1	—	1
							計	35	20	55	63	9	72



7月25日付 博士学位授与者



9月26日付 博士学位授与者

日誌

2005.8.1～8.31

- 8月11日 全学共通教育システム委員会
- 〃 京都大学オープンキャンパス2005（12日まで）
- 23日 施設整備委員会
- 29日 役員会

- 31日 APRU／AEARUリサーチシンポジウム
- 2005「環太平洋地域における地震危険度－その予測と防災」（9月2日まで）

部局の動き

生存圏研究所が第6回国際木質科学シンポジウム等を
インドネシア・バリにて開催

生存圏研究所は、インドネシア科学院（LIPI）とともに日本学術振興会拠点大学交流事業の一環として、第6回国際木質科学シンポジウム（8月29日（月）～30日（火））および拡大連絡協議会（8月31日（水））をインドネシア・バリにおいて開催した。今年度は、現在実施している拠点大学交流事業「木質科学」の10年間の取り纏めの年度にもあたり、「熱帯森林資源の保全と利用の調和を目指して」（Towards Ecology and Economy Harmonization of Tropical Forest Resources）を統一テーマに総括的な国際シンポジウムとして開催された。本シンポジウムへは、日本77名、インドネシア114名、マレーシア2名、ベトナム1名の計194名にもおよぶ多数の参加があり、熱帯森林資源の持続的な生産と利用に関して国際的な視野から活発な議論がされた。

開催初日には、Umar Anggara Jenie LIPI長官の開会宣言に始まり、Endan Sukara同生命科学部門長（インドネシア側コーディネーター）、松本 紘生存圏研究所長、遠藤洋路日本学術振興会地域交流課長、今村祐嗣生存圏研究所教授（日本側コーディネーター）の順に挨拶ならびに10年間に亘る実績についての報告があった。その後、基調講演の後、各テーマセッションに分かれて活発な議論が展開された。



2日目には、生存圏研究所・LIPI・ムシフタンベルサダ社の3者による研究協定が締結され、スマトラ南部地域をフィールドとするアカシヤマンギウム研究プロジェクト計画の実施が合意された。シンポジウム閉幕にあたり、インドネシア側サブコーディネーターであるLIPI生物材料研究センター長のBambang Subiyanto教授より今回のシンポジウムの成果達成について、日本学術振興会および生存圏研究所に対し感謝の弁が述べられた。

また、3日目には、開催場所をLIPI所有のエカカルヤ植物園会議場に移し、日本と相手国の拠点校および協力校の関係者による連絡協議会、ならびに大学院生や若手研究者を集めたヤングサイエンティスト会議が開催された。最後に熱帯林の保全と利用の共同研究の発展を願って代表者による記念植樹を行い、終始活発な議論の中で3日間におよぶ全体プログラムが終了した。今後、この俯瞰的に総括された成果を基に国際共同研究を中心とする活発な学術交流の展開が大いに期待できる内容となった。

（生存圏研究所）



握手を交わす松本所長(左)とアニータ・フィルマニティー
インドネシア労働省建築研究所科学技術事業課長

寄附講座「日中環境技術研究講座」の新設

10月1日から、大学院工学研究科に寄附講座が新設された。今回設置されたのは、「日中環境技術研究講座」でその概要は以下のとおり。

- | | |
|---|--|
| <p>1. 部 局 名 大学院工学研究科</p> <p>2. 名 称 日中環境技術研究講座</p> <p>3. 寄 附 者 環境産業関連企業
(国内企業29社：下記のとおり)</p> <p>4. 寄附金額 総額1億3千8百万円</p> <p>5. 設置期間 平成17年10月1日
～平成20年9月30日</p> <p>6. 担当教員 助教授相当 管 運涛
助手相当 水野 忠雄</p> <p>7. 研究目的 驚異的な発展を続ける中国においては、それに伴う顕在的・潜在的環境問題が生じており、かつその広大さから環境問題のフロンティアといえる。中国清華大学深圳校（香港付近に新設された清華大学の分校）内に1講座相当分のスペースを借り、そこを拠点として、中国の環境問題に関して研究・教育・実務を清華大学と協働し、学術の交流、環境技術の普及、新技術の開発及び人材の育成等を行う。</p> <p>8. 研究内容 広流域環境汚染問題の解決方策、未活用再生可能エネルギー、省エネルギー・省資源型クリーナー技術の開発、水・汚濁物循環管理、クリーナープロダクション技術の開発等</p> <p>9. 研究課題 ・広流域環境汚染問題（珠江流域でのPOPsや重金属による汚染など）と管理（リモートセンシング・GIS他）</p> | <p>・未活用再生可能エネルギー（埋立地ガスや都市・産業廃棄物その他バイオマス）の利用技術の開発と温室効果ガスの削減計画</p> <p>・省エネルギー・省資源型クリーナー技術（廃水処理・大気汚染制御・固形廃棄物処理処分）の開発と普及</p> <p>・水・汚濁物循環（上水道・下水道）とリスク（水系感染症など）管理</p> <p>・循環型社会を支えるクリーナープロダクション技術の開発と普及</p> <p>(寄附者)</p> <p>新明和工業(株), (株)荏原製作所, 鹿島建設(株), 川崎重工業(株), (株)クボタ, J E F エンジニアリング(株), (株)神鋼環境ソリューション, 新日本開発(株), 新日本製鐵(株), 住友重機械工業(株), ダイネン(株), 太陽築炉工業(株), (株)タクマ, 中外炉工業(株), 東京電力(株), 日立造船(株), 大阪ガス(株), 大阪ガスエンジニアリング(株), (株)きんでん, 栗田工業(株), 呉羽環境(株), 太陽アーモ(株), 月島機械(株), 日本碍子(株), ビーエルテック(株), 日立機電工業(株), 日立プラント建設(株), 前澤工業(株), 三菱重工業(株)</p> <p>(順不同)</p> |
|---|--|

寸言

除虫菊と私 —私のライフワーク—

勝田 純郎

医薬、農薬など生理活性物質は経験的に古くから効果のある天然物が使われ、化学者によって有効成分の化学構造が決定され、次いで天然物の構造改変によって多くの有用な化学合成品が創製される場合が多い。



蚊取り線香の有効成分として、除虫菊の花は明治23年（1890）から昭和30年頃迄約70年間、日本始め東南アジアで広く使われた。一方、除虫菊の花に含まれる殺虫成分ピレトリンの化学的研究は1908年日本の藤谷氏によって始められ、その後スイス、アメリカ、日本の学者らによって1945年その平面構造が決まった。しかし、殺虫効力と密接な関係を示すのは立体構造であることが明らかとなり、各国の研究者によってピレトリンの立体構造が次々と解明された。ただピレトリン（エステル）のアルコール成分の絶対配置については未知のまま残されていた。

私はアルコール成分の光学活性をそのまま保持しつつ化学的に変換し、絶対配置既知の化合物へ誘導する方法によって昭和33年ピレトリンの立体構造の全貌を明らかにした。即ちピレトリンの絶対構造が決定されるまで50年かかったことになる。

それ以後、ピレトリンの立体構造をモデルとして日本、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツの各国研究者が次々と新規ピレスロイド（天然と合成品の総称）を開発し、家庭用殺虫剤、衣料防虫剤、農薬、動物薬、シロアリ駆除剤など各分野で使用されるようになった。合成ピレスロイドの第一号として天然ピレトリンに極めて構造の類似したアレスリンが昭和28年住友化学で工業化され、蚊取り線香の有効成分として今日まで使われている。

人間も害虫も動物であるから虫に効く（殺虫）ものは人間にも毒性が強いと云える。ところがピレスロイドだけは虫に対して速効性を示すが、哺乳動物には安全性が高い（選択毒性）と云う特長をもつ唯一の化合物である。

多くの合成ピレスロイドの中には効力アップを重視するあまり、天然ピレトリンの構造から随分かけ

離れた化合物が開発されているが、私は効力と安全性を兼備した健全なピレスロイド化学の発展を願う次第である。

戦後はDDT、BHC、クロルデンなど有機塩素系殺虫剤やパラチオン、ダイアジノンなど有機リン系殺虫剤が使われた。戦後の10年間は衛生状態が最悪で、種々の疫病、伝染病のため多くの人が亡くなった。多くの病気を媒介する害虫駆除にこれらの殺虫剤は大いに貢献した。しかしこれらの殺虫剤は化学的に安定なため自然環境で分解せず、食物連鎖によって濃縮することが明らかとなり、いずれは人体に移行し残留することが証明され、使用禁止になったものが多い。

私は農芸化学科3回生の卒論実験を武居三吉研究室で学び、化学の面白さを知った。武居先生は有機化学の泰斗で、デリス根の殺虫成分ロテノン、除虫菊の有効成分ピレトリン、青葉アルコール、茶の香気成分など天然物有機化学の研究で多くの業績を挙げられた。

武居先生の厳格な指導のもと、研究室には優秀なスタッフが多勢おられ活気に満ちていた。私は昭和24年武居先生の推薦で大日本除虫菊（株）に入社し、今日まで56年間研究開発、製造の仕事に携わってきた。入社後約1年間高槻にあった京大化研の武居研究室でアレスリンの合成研究をし、パイロット製造まで計画したが、除虫菊の価格が下がったため中止となった。短い期間であったが、先輩の井上雄三先生（現名誉教授）から実に多くのことを学び感謝に堪えない。当社は人畜に安全な害虫駆除薬剤を製造し、人類の保健衛生に寄与すると云う誠に価値ある仕事で、私は職業に誇りをもって、迷うことなくライフワークのピレスロイド研究に没頭できたことを感謝している。又私の開発した新規ピレスロイドが世界で使われていることを嬉しく思うと共に、よい環境を与えてくれた会社、ならびに研究協力者に感謝する。

—基礎研究なくして応用研究なし— 私の真情

（かつだ よしお 大日本除虫菊株式会社特別顧問、中国科学院・動研名誉教授、上海工程技術大学名誉教授、昭和24年農学部卒業）

随想

ラッセル・アインシュタイン宣言と
湯川博士

名誉教授 田中 正

2005年はヒロシマ・ナガサキの惨禍から60年、さる7月下旬被爆地広島で、第55回パグウォッシュ会議が開催された。会議開催の直前、湯川秀樹先生（1907－81）に直接、間接に師事したわれわれ京都在住の三名、高木修二（阪大名誉教授）、加藤利三（京大名誉教授）両氏と筆者は、この会議にむけて「日本の科学者からのメッセージ」を送ることを思い立ち、各方面に協力を呼びかけた。さまざまな幸運に恵まれて、最終的には基礎物理学研究所長や京大総長の賛同をいただき、数日間に学内外257名の連名のメッセージを実現することができた。この機会に深く感謝するとともに、改めて湯川先生の世界平和への足跡をたどり、明年、明後年に迎える湯川・朝永生誕百周年への筆者の期待を述べたい。

50年前、原水爆の脅威と人類の危機を訴えたラッセル・アインシュタイン宣言（1955. 7, ロンドン）の署名者11名に名をつらねた湯川先生はそのとき48歳であった。戦後1948年、プリンストン高等学術研究所に招かれて渡米、アインシュタインと一年に及ぶ親交を重ね、翌年の1949年には日本人初のノーベル物理学賞を受賞。1953年に帰国して基礎物理学研究所長に就任した翌年の3月にはビキニ（水爆実験、死の灰）事件が起り、これが大きな衝撃となってラッセル・アインシュタイン宣言は生まれた。それに応えて1957年、第一回パグウォッシュ会議（世界10カ国から、22名）が開かれ、日本から湯川、朝永（振一郎 1906－79）両先生らが参加されたが、今回はその55回目当たる。

湯川先生の戦後の平和思想、世界連邦への確信は、この1948年のアインシュタインとの出会い、ことにその思想、“全体的破滅を避けるという目標は、他のあらゆる目標に優位せねばならぬ”（「アインシュタインの原則」1948）や「世界政府」の考えに深くおっていることは、先生の貴重なエッセー「ア



インシュタインと私」（湯川監修『アインシュタイン選集3』所収、共立出版 1971）からもはっきり読みとれる。

一方、今日的課題としてこのアインシュタインの世界政府と湯川の世界連邦に新たな考察が加えられることが望まれる。両者がともに核時代を超える人類史的ビジョンにたつと同時に、前者ではややもすると自らの悲劇的体験から、「ナチス」や核の脅威に備える「超国家管理下の武装平和」というイメージ（『アインシュタイン平和書簡』みすず書房、1977）が先行しがちである。それに対して、「アインシュタインに発し、アインシュタインを超えた」とも評される湯川の世界連邦とその平和思想の形成には、原子爆弾の出現とともに、日本国憲法の平和主義が大きく寄与しているとする指摘は興味深い。

実際、1962年5月、次第に大規模化するパグウォッシュ会議に対して、日本の科学者の平和への独自の寄与を強めようとの先生の強い意図のもとに、科学者京都会議が創立されるが、以後5回にわたる会議の声明ではつねに憲法九条あるいは前文の人類史的意義が説かれ、それはラッセル・アインシュタイン宣言とともに、核時代を超えて人類が生き残る唯一の可能性、“もはや国ごとの軍備を必要としない真に平和、かつ公正な世界システム”をこの地球上に実現するための布石であることが述べられている。

またその考えは、先生の遺言とも言うべき不朽の論考「日本国憲法と世界平和」（『世界』1965. 6, 『湯川秀樹著作集5』岩波書店所収）にいつそう顕著であり、今回のわれわれのパグウォッシュ会議へのメッセージの立脚点でもあった。

きたる湯川・朝永生誕百周年を機に、ここ京都の地に文系、理系の協力による新たな「科学者京都会議」と21世紀の確かな『平和学』が誕生することを期待している。

（たなか しょう 元理学部教授、平成4年退官、専門は素粒子論）

洛書

問い合わせいろいろ

西山 伸

京都大学の歴史に係る資料を取り扱うことを業務としているわが大学文書館には、京大の歴史に関する様々な問い合わせがある。学内の教職員、学生、学外の研究者、一般の方、マスコミ等、問い合わせてくる人々も多様である。今回は、そのようななかから、いくつか選んで紹介する。いわば「京大史FAQ」というわけである。



・時計台前のクスノキの由来

この質問は多い。詳しくは現在時計台記念館1階歴史展示室で展示中の「時計台の昔と今」をご覧ください。今植わっているクスノキは1935（昭和10）年に植えられた2代目。当然のことながら、最初は人の背丈とあまり変わらないくらい小さな木だった。初代はその前年の室戸台風で折れてしまっており、その後というわけだ。では初代は、というと残念ながらよく分からない。時計台建設前に撮られた写真に写っているので、時計台よりも古いのは間違いのないのだが。

・なぜ関西の大学は学年を「回生」と表記するのか
マスコミ関係からの質問ではこれがいちばん多い。京大創立時のカリキュラムは、東大と比較して科目選択の自由度の高いものだった。東大が1年間で揃えなければいけない単位を厳密に設定し、不足したものは留年という措置をとったのに対して、京大は在学期間中ならいつとってもよいという科目を多めに設定した（前者を学年制、後者を科目制という）。ここから、東大では各学年の段階を強調した「年生」という言葉が使われ、一方京大では入学してから何年目かという「回生」という言葉が用いられる

ようになったのではないかと推測している。そして、それぞれの大学で学んだ教員が近辺の大学で勤務するようになって、両方の言い方が広まったのではないだろうか。

・東大路に面した石垣の由来

最近はこの質問も多い。一説には、幕末にあった尾張藩屋敷の頃からのものではないか、とも言われているが、それは違うようだ。1889（明治22）年に大阪から現在の本部構内に移転してきたばかりの第三高等中学校（のちの三高）の写真には、石垣ではなく木製と思われる柵が写っている。それに、現在の東一条から北の道は、京大創立当時は昼なお暗き細い道だったという証言があり、そのような道に面して豪壮な石垣が作られるとは考えにくい。東大路が拡幅されて路面電車が通るようになるのは1920年代後半のことだから、石垣もその頃のものではないだろうか。

その他、ある人がいつ在学していたのか、いつ京大の教員になったのか、といった質問も多い。それは、『京都大学百年史』や、かつて毎年発行されていた『京都大学一覧』などを見ればだいたい判明する。また、今年は「戦後60年」ということもあるのか、「学徒出陣」に関する問い合わせもいくつかある。現在大学文書館では、「学徒出陣」に関して調査中であり、調査結果がまとまればある程度お答えできるようになると考えている。

歴史の古い京都大学であるから、いろいろとお分かりにならないこともあるかと思う。お気軽に大学文書館に問い合わせただけなら幸いである。

（にしやま しん 大学文書館助教授、専門は日本近現代史）

訃報

このたび、^{たけやまみき お}竹山幹夫名誉教授、^{まつうらしげたけ}松浦重武名誉教授、^{おおの えいじ}大野英二名誉教授が逝去されました。
ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に各名誉教授の略歴、業績等を紹介します。

竹山 幹夫 名誉教授



竹山幹夫先生は、5月20日逝去された。享年84。

先生は、昭和19年京都帝国大学理学部を卒業し、兵役の後、同20年より京都帝国大学理学部副手、同22年より同助手を務められ、同27年より広島大学理学部講師、同28年より同助教授を経て、同34年京都大学教養部教授に就任された。昭和59年に停年退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。その間、京都大学学生部委員会委員、安全衛生委員会委員などを務められ、本学の管理、運営に寄与されると共に、教養部においては各種委員会委員長を歴任され、とりわけ学園紛争時には教養部長の補佐役として尽力された。

先生の専門は、一貫して電磁波を用いた実験による物性研究であった。まず、矩形導波管を用いた誘電測定の方法を立体回路理論に基づいて確立され、各種の物質の電気的特性を解明された。その後、原子時計、磁気共鳴、高出力マグネトロン等の研究も手がけられ、マイクロ波技術の発展に寄与された。

プラズマ・核融合研究の勃興期には、プラズマ陽光柱に発生する低周波粗密振動現象を解明されるなど、プラズマ中の電離波動の研究の基礎を築かれた。さらに、共鳴探針によるプラズマ密度の測定技術の開発、イオン音波についての研究を進められ、その後の日本のプラズマ研究を推進した研究者に多大な刺激を与えられ、また支援された。

教育においては、主として物理学の基礎教育、実験教育に携わられ、多数の著書を残されており、現在の総合人間学部提供の全学共通科目・物理学実験にその功績が継承されている。また、大学院理学研究科において電波分光学、プラズマ物理学のセミナーを担当され、後進研究者の育成に寄与された。昭和58年には大連外国語学院に赴かれ、中国政府派遣大学院留学生に対する専門日本語教育にも貢献された。

先生の公正な姿勢と快活な人柄は、学園紛争時のみならず、その後の教養部改革の激論の過程において、教職員にとって大いなる救いであった。

(大学院人間・環境学研究科)

松浦 重武 名誉教授



松浦重武先生は、8月27日逝去された。享年75。

先生は、昭和28年京都大学理学部物理学科を卒業、同大学院理学研究科修士課程を同30年に修了後、直ちに同年4月京都大学理学部助手に採用され、同32年11月同講師、同40年11月に同助教授となり、同42年1月に京都大学数理解析研究所教授に就任、応用解析第一研究部門を担当された。平成6年停年により退官され、

京都大学名誉教授の称号を受けられた。

先生は、解析学、中でも偏微分方程式論に関する研究において優れた研究業績を残され、その発展に寄与された。とりわけ代数幾何学を援用することにより定数係数線型偏微分方程式の過剰決定系の解の構造の研究を進められ、この分野の世界的権威の一人と見做されていた。先生は、また、設置後未だ日の浅かった数理解析研究所に教授として着任されて以来、その運営の基本型の形成にも尽力された。

(数理解析研究所)

大野 英二 名誉教授



大野英二先生は、9月6日逝去された。享年82。

先生は、昭和20年に京都帝国大学経済学部を卒業、同21年10月まで同大学大学院経済学研究科に在籍ののち、京都

大学経済学部講師、同学部助教授を経て、同41年1月同学部教授に就任され、経済政策学講座を担当された。昭和61年3月停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、昭和46年1月から同47年1月まで経済学部長及び評議員を務められ、大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、昭和61年4月から平成7年3月まで、中部大学国際関係学部において教育研究活動を続けられた。

先生は、ドイツの経済政策研究において深い学識

を示し、その理論的・実証的研究は、学会を代表するものであった。初期の代表作『ドイツ金融資本成立史論』（昭和31年）における銀行分析、中期の大作『ドイツ資本主義論』（同40年）における経済政策の総合的把握でドイツ資本主義研究の第一人者となった先生は、後期には、論争的な研究『現代ドイツ社会史研究序説』（同57年）において組織資本主義論と比較社会史的視座を明確に提示し学会に強いインパクトを与えた。徹底した学究者としての姿勢は、本学退職後もいささかも衰えることはなく、その成果は『ナチズムと「ユダヤ人問題」』（同63年）、『ドイツ問題と民族問題』（平成6年）、『ナチ親衛隊知識人の肖像』（同13年）、『比較社会史への道』（同14年）の4冊に結実しており、お亡くなりになる直前まで研究者として現役であった。

（大学院経済学研究科）

話題

医学部附属病院で「小さな音楽の集い」を実施

医学部附属病院では、9月21日（水）に、本院と医学部保健学科のボランティアグループ「ユリの木の会」との共催による「小さな音楽の集い」を外来棟3階図書コーナー「ほっこり」にて実施した。

この「小さな音楽の集い」は、昨年から行なわれているもので、外来患者、入院患者の方を含む約80名の参加があった。

はじめに、保健学科の学生2名による琉球三味線とギターとのコラボレーションにより「涙そうそう」「島歌」などが演奏された。特に沖縄出身の学生が演奏する琉球三味線の力強い音色が会場中に響いていた。

続いて、看護学科の学生7人によるピアノと合唱



保健学科の学生2人による琉球三味線とギターとのコラボレーション

による「翼をください」などが歌われた。

このほか、ピアノの独演、市民ボランティアのギターと歌などが披露された。

国際交流科目「中国の社会・経済・文化」の中国臨地研修，初めての実施

本年度より，学部学生の海外体験や海外留学を促進することを目標に，全学共通科目として，夏期ないしは春期の休業期間中に2週間程度の海外研修を含む集中講義方式で行われる国際交流科目が創設された。現地での研修を通じ，自然，政治，経済，文化，歴史など幅広い学習を行うことにより，学生の将来に役立つ国際的な視点を持たせることが目的である。

今般，その第1回目の科目として，全学の1-3年生，15名が参加した「中国の社会・経済・文化」の中国での研修が終わり，無事に帰国した。

研修は，8月9日（火）より22日（月）までの14日間にわたって，上海の復旦大学に置かれている本学経済学研究科の上海センター支所を拠点として，復旦大学日本研究中心の協力を得て実施された。

事前に十分な目的意識とアカデミックな裏付けを持った研修とすべく，5月から都合5回にわたり，事前講義を開催し，テーマに見合った訪問先の選択など研修内容を学生とともに考えることとした。各学生の問題意識は，歴史，文化，教育，経済，都市と農村の格差，環境，対中ODAなど多岐にわたり，学生からは是非とも中国の学生や人々との交流をしたいという強い要望もあり，プラン作成において考

慮に入れられた。

実地での研修内容は，復旦大学の教授陣より「襟の色から見た中国（ブルーカラーとホワイトカラー）」，「中国外交と政治」，「中国の伝統文化」などの講義，上海では，宝山製鉄所，オムロン上海の訪問，また上海の日本人若手駐在員の集まりである青年経済懇話会との懇談会を行うこともできた。研修のフィールドを上海の外に移して，安徽省，江蘇省を訪問し，訪れた農村でも，出稼ぎにでる者が多いなど農業離れが進んでおり，また農家の間の所得水準格差の拡大など，中国の農村の変貌ぶりを垣間見ることができた。蘇州市では，国際協力銀行（JBIC）の協力で，日本の環境ODA（円借款）事業である下水処理場を訪問した。



巢湖の農家ででの聞き取り調査

上海からの帰路は，神戸までのフェリーであった。2日間の船旅であるが，幸いに波は静かで，昼は船内の食堂を借りて，全員が研究テーマについてのプレゼンテーションを行い，議論をした。

今回のプログラムは派遣のみでなく，9月28日から10月5日まで復旦大学の学生が本学での研修を行う予定であり，両国の学生にとって貴重な交流の一步となるものと期待している。



オムロン上海での研修

京都大学原爆災害総合研究調査班遭難者の慰霊の集いを開催

昭和20年、原子爆弾が投下された広島で被爆者の診療にあたっていた「京都大学原爆災害総合研究調査班」は、同年9月17日西日本を襲った大型台風による山津波に見舞われた。この山津波で犠牲となった方々を慰霊する集いが、災害のあった日の9月17日（土）広島県佐伯郡大野町において開催された。

調査班は、軍の依頼を受けて医学部と理学部を中心とした教員、学生、看護婦らで結成、9月3日からは大野町に所在する大野陸軍病院を拠点に原子病患者の治療および病理学的研究調査が約50名になった調査班員により進められていたが、折しも広島を襲った「枕崎台風」による山津波で班員11名を含む156名が死亡した。

慰霊は、例年災害のあった9月17日の直近の土曜日に自由参拝で行われているが、本年は5年に1度の式典開催の年にあたり、遺族をはじめ関係者、一般町民の方を含む、約90名の参列があった。

式典では、犠牲者への黙祷のあと、尾池和夫総長、成宮 周医学研究科長、北村雅夫理学研究科長、笠井久雄大野町長からの追悼のことばがあり、続いて眞下英夫氏より遺族代表のことばが述べられた。最後にご遺族、



慰霊碑に献花する参列者

調査班員、参列者等の全員による献花が行われた。

続いて宮浜グランドホテルで開催された懇親会では、成宮医学研究科長の挨拶の後、翠川 修本学名誉教授による乾杯の発声、伴 敏彦本学名誉教授によるスピーチ、慰霊の集いの開催にご尽力頂いている芝蘭会（医学部同窓会）広島支部箱田允昭医師から近況報告などが語られ、今年11月3日に大野町と合併する廿日市市の山下三郎市長から、今後は廿日市市が継続して記念碑を管理する旨の挨拶があった。

「事務改善提案コンクール」表彰式を開催

「事務改善提案コンクール」の表彰式が、9月28日（水）16時30分より、総長応接室で開催された。

同コンクールは、本学における事務改善に関する具体的な提案を広く教職員から募集し、今後の事務の合理化、効率化その他事務改善に資することを目的として実施されたものであり、6月から7月にかけて募集が行われ、個人・グループ合わせて184件の応募があった。

応募のあった提案については、総長を委員長とする審査委員会において審査が行われ、その結果、下記のとおり、特選1件、入選7件、佳作4件、敢闘賞1名が選考された。

表彰式では、総長より受賞者へ、それぞれ表彰状の授与と、副賞が贈られた。

【特選（1件）】

中野雅夫・福田美紀 医学部附属病院
「変形労働時間制導入による経費削減」

【入選（7件）】

前田 進 宇治地区事務部

工学経理課グループ	工学研究科
宮内 照明	農学研究科
山下 靖弘	人間・環境学研究科
松永 倫紀	研究・国際部
植野由美子	理学研究科
藤木 清文	工学研究科

【佳作（4件）】

林 晴夫	共通教育推進部
原 彰子	経済研究所
企画課評価チーム	企画部
鹿島 功介	医学部附属病院

【敢闘賞（1名）】

福元 隆	宇治地区事務部
------	---------

表彰者の提案概要などに関する詳細は、教職員専用ホームページをご参照ください。

http://www.kyoto-u.ac.jp/notice/05_notice/close/kaikaku/concours170928.htm

公開講座

エネルギー科学研究科公開講座

物理と化学でわたしたちの地球のあり方を考えよう

ー巨大地震、エネルギー変換デバイスと核融合ー

1. 日 時：11月12日（土）13：00～17：00

2. 場 所：京都大学工学部2号館201講義室

3. 演題と講師：主催者挨拶

「巨大地震時の揺れに備えるために」エネルギー社会・環境科学専攻 教授 釜江 克宏

「新しい電解質 イオン液体」 エネルギー基礎科学専攻 教授 萩原 理加

「核融合の拓く未来社会」 エネルギー変換科学専攻 教授 小西 哲之

「講師を囲んで」（来聴者と懇談）

4. 受講料：無料

5. 問い合わせ先：エネルギー科学研究科 学術・管理掛

TEL：753-4744

E-mail：kenji.harada@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

詳細はエネルギー科学研究科ホームページをご覧ください。

<http://www.energy.kyoto-u.ac.jp/>

京都大学21世紀COE「物理学の多様性と普遍性の探求拠点」

第3回 市民講座「宇宙と物質の神秘に迫る ～物理科学最前線～」

1. 日 時：11月20日（日）13：00～17：00

2. 場 所：時計台記念館百周年記念ホール

3. 演題と講師：特集テーマ「極限状態を見る」

見えない世界をガンマ線で見ると：ブラックホールからガン細胞まで

理学研究科 教授 谷森 達

ニュートリノ：極微の粒子がなぜ面白い？

理学研究科 教授 西川公一郎

スピンの目で見るとミクロの世界－MR I顕微鏡の開発と磁気構造－

理学研究科 教授 水崎 隆雄

なお、講演終了後(17:30～18:30)に、講師の方々と歓談できる簡単な茶話会を開く予定です。

4. 対象：中高生以上

5. 受講料：無料（但し、茶話会参加者は実費500円要）

6. 定員：500名

事前申し込みは必要ありませんが、講演終了後の茶話会への参加は当日お申し込みください。

7. 問い合わせ先：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町 京大理学部 物理学第2教室内

京都大学21世紀COE事務局 市民講座「宇宙と物質の神秘に迫る」係

TEL：075-753-3758 E-mail：shimin@cr.scphys.kyoto-u.ac.jp

詳細は、<http://physics.coe21.kyoto-u.ac.jp/>をご覧ください。

8. 後援：京都新聞社、物理教育学会、天文教育普及研究会、京都市教育委員会、京都府教育委員会

お知らせ

京都大学鉄道研究会50周年記念

京大サロン写真展

鉄道のある情景 ～暮らしの中の鉄道を再発見する写真旅行～

京大サロン写真展「鉄道のある情景 ～暮らしの中の鉄道を再発見する写真旅行～」を時計台記念館京大サロンにおいて開催します。本写真展は京都大学鉄道研究会の創立50周年を記念して、OBを主体に現役が協力して交通科学博物館（大阪）にて開催された写真展（2005.9.10～25）から京都にゆかりのある鉄道の写真を中心に約20点を選んで展示し、50年におよぶ鉄道研究会の活動を紹介します。会期中に展示作品の入れ替えも予定しています。美しい風景にとけ込む鉄道の数々をぜひご覧ください。

多数のご来観をお待ちしています。

1. 会 場：時計台記念館 1 階 京大サロン
2. 会 期：10月1日（土）～12月4日（日） 9：00～21：00
10月30日（日）および12月4日（日）の展示は17時までです。
会期中に展示作品の入れ替えを予定しています。
3. 休 館 日：なし
4. 入 館 料：無料
5. 問い合わせ先：京都大学鉄道研究会 E-mail：tekken@kyoto.office.to
詳細は京都大学鉄道研究会ホームページをご覧ください。http://go.to/kurc

高等教育研究開発推進機構 特別企画展 movement / 形態 / expression

このたび本機構では“芸術の秋”に彩りをそえるべく、「京都大学 高等教育研究開発推進機構 特別企画展 movement / 形態 / expression」を開催することとなりました。

本機構では、従来から“活力ある教育の場の形成”を目指し、京都を拠点として活発な創作活動をされている新進の芸術家の絵画や彫刻を常設展示しており、本学学生を始め広く関係者から好評を得ております。

今回開催する特別企画展も上記芸術家の方々のご協力を得て実現するものであり、個性あふれる作品をご観覧いただけるものと期待しております。

1. 日 時：10月11日（火）～11月15日（火） 9：00～19：00（土・日・祝日は閉館）
2. 場 所：京都大学 吉田南総合館 北棟・吉田南1号館 B F
3. 入 場 料：無料
4. 企 画：akemi imagawa-sato（京都大学大学院工学研究科物質エネルギー化学専攻）
5. 問い合わせ先：高等教育研究開発推進機構（TEL：753-9344）
詳細は高等教育研究開発推進機構のホームページをご覧ください。
http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/gallery.cgi

京大 I I O フェア ～京都大学の知の活用～

「京大 I I O フェア」は、企業の方々と京都大学の出会いの場です。シーズプレゼンテーションでは、研究室を代表する教員が企業との連携可能な研究シーズを紹介しています。産学交流会では多数のポスター展示を行い、フェア参加の皆様とシーズ提供教員が直接相談できる場を提供します。皆様のご参加をお待ちしております。

1. 日 時：11月16日（水）13：00～
2. テーマ：I T ・ナノ・材料
3. 会場：京都大学ローム記念館（京都市西京区京都大学桂）
4. 申し込み：I I O フェア登録フォームに所用事項をWeb上で記入の上送信してください。

<http://backup.iic.kyoto-u.ac.jp/iio-fair/entry.php>

5. 問い合わせ先：京大 I I O フェア事務局

〒615—8520 京都市西京区京都大学桂 京都大学ローム記念館内

T E L : 383—3030 F A X : 383—3031 E-mail : iio-fair@iio.kyoto-u.ac.jp

無料法律相談のお知らせ

—12月6日（火）・12月8日（木）実施分について申し込みを受付中—

京都大学法科大学院では、授業の一環として行う法律相談実務演習（リーガル・クリニック）において、月に2度、無料法律相談を実施しております。

この無料法律相談は、日常生活の中で生じるさまざまな法律問題について、弁護士の立会いと指導のもと、既に法律知識を習得している法科大学院3年次の学生が市民の方々からのご相談に乗り、必要な助言を行うものです（秘密は厳守いたします）。

現在、12月6日（火）・12月8日（木）実施分について申し込みを受付中です。詳細は以下をご覧ください。

京都大学ホームページ「ご利用いただける施設」

http://www.kyoto-u.ac.jp/access/05_jyoho/jyoho_2.htm

あるいは

京都大学法科大学院ホームページ

<http://lawschool.law.kyoto-u.ac.jp/index.html>より、「無料法律相談のお知らせ」

問い合わせ先：大学院法学研究科第二教務掛 リーガル・クリニック担当者

〒606—8501 京都市左京区吉田本町

T E L : 753—3262 F A X : 753—3129（午前10時～午後5時／土日祝休）

教育学研究科国際シンポジウム

(全て参加無料・申込不要です。詳細は、<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/event/>をご覧ください。)

・第2回：テーマ「大学教育の知の彼方へ」(通訳付き)

日 時：11月6日(日) 9:30~17:40
 会 場：京大会館 (<http://www.kyodaikaikan.jp/>)
 講演者：Paul Standish (シェフィールド大学/教育哲学)
 David Ericson (ハワイ大学/教育哲学)
 Victor Kobayashi (ハワイ大学/比較教育学)
 今井 康雄 (東京大学/教育哲学)
 高見 茂 (京都大学/教育政策学)
 田中 每実 (京都大学/大学教育学)
 渡邊 洋子 (京都大学/生涯教育学)

問い合わせ先：齋藤 直子 (TEL: 075-753-3036)

・第3回：テーマ「子どもの教育と未来力」(通訳付き)

日 時：11月12日(土) 13:30~17:40
 会 場：芝蘭会館 (<http://inet.museum.kyoto-u.ac.jp/japanese/event/shiranhall.html>)
 講演者：朱 小 蔓 (中国中央教育科学研究所/道德教育)
 高 峽 (中国中央教育科学研究所/教育課程)
 田中 耕治 (京都大学/教育方法学)

問い合わせ先：杉本均 (M52290@sakura.kudpc.kyoto-u.ac.jp)

・第4回：テーマ「暗黙知と熟達化」(英語講演は日本語解説付き)

日 時：12月18日(日) 10:30~17:00
 会 場：京大会館 (<http://www.kyodaikaikan.jp/>)
 講演者：Richard Wagner (フロリダ州立大学/心理学)
 野中郁次郎 (一橋大学/経営学)
 楠見 孝 (京都大学/認知心理学)
 松尾 睦 (小樽商科大学/経営学)
 伊東 昌子 (常磐大学/認知心理学)
 平田 謙次 (産能大学/学習科学)
 Moisés Kirk de Carvalho Filho (JSPS/教育心理学)

問い合わせ先：楠見 孝 (kusumi@mbox.kudpc.kyoto-u.ac.jp)

編集後記

最近、国際シンポジウムの記事が多くなってきました。各部局からの記事提供が積極的になってきたこともあるでしょう。それに、新聞記事によると平成16年の時計台記念館での国際会議の開催回数53件、京都で行われる国際会議会場での開催回数のトップになったとのこと、これも要因の一つでしょうか。一方、本学の海外交流拠点もアメリカ、東アジア、アフリカを中心に今世紀に入って25カ所増え、34カ所と3倍強となり海外での研究活動が益々活発化しています。

京大広報が大学の管理運営情報に加え、教育、研究や医療活動を紹介する広報誌としての役割が果たせるよう各部局からの記事提供をお待ちしています。

海外交流拠点のURL：http://www.kyoto-u.ac.jp/uni_int/01_camp/foreign.htm